

史の杜

FUMI NO MORI

6

CONTENTS

- ❖ 古文書のひろば① 研究者が伝えた地域の古文書 一長井政太郎収集資料から一
- ❖ 古文書のひろば② 伊藤東溟の史料とその生涯 一北海道当別町戸田家文書より一
- ❖ 古文書のひろば③ 松島古文書散歩
- ❖ 講演会余話 仙台藩にゆかりのある坤輿万国全図
- ❖ 地域とのあゆみのなかで 仙台市の市民参加型事業に参加して 地元学と古文書
- ❖ 上廣歴史資料学研究部門 2017年度の活動

古文書の ひろば 1

研究者が伝えた地域の古文書 一長井政太郎収集資料から一

私たちが史料レスキューや現状調査をおこなったあと、まとまりのある文書群に名前を付けます。たとえば、これまで『史の杜』で紹介してきたものでは「川崎町・佐藤仁右衛門家文書」や「白石市・渡辺家文書」などが挙げられます。これは通称「家文書（いえもんじょ）」と呼んでいますが、それぞれの家で大切に保管されてきたことを意味し、先祖代々の記録や、所在地である村や町の書類を含んでいます。また、市町村や会社、学校、団体などの文書にもその組織の名称を付けることで、史料のイメージが浮かんでくるように思います。

平成25年度から山形県立博物館主催「古文書歴史講座」（年間2回）が部門の協力事業として開催されています。この講座は部門の教員が交代で講師を務め、「古文書」や「地域の歴史」が重要であることを受講者のみなさんに知っていただこうという

企画です。普段は宮城県内を中心に調査・研究をおこなっていますので、おとなりの山形で史料にふれる機会は少ないのですが、講座をきっかけとして私たち自身も新たな発見や興味深い史実に出会います。

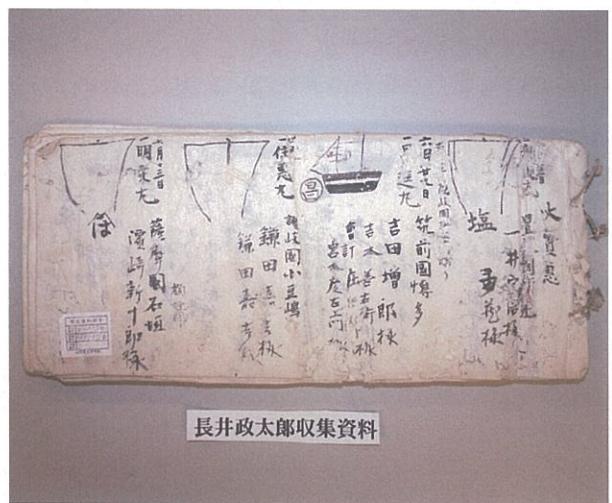


●【写真1】山形県酒田市飛島（写真提供：庄内観光コンベンション協会）

長年にわたって山形の歴史資料を調査・収集してきた県立博物館には貴重な史料が数多く保管されていますが、私がいま注目しているのは「長井政太郎(ながい・まさたろう)収集資料」です。さきほど名称を付けるという話をしましたが、この文書群には読んで字のごとく長井政太郎という人物が収集した歴史資料がまとまって収められています。長井政太郎氏(1905年生~1983年没)は、山形大学・東北学院大学・山形女子短期大学で教授を務めた学者でした。私が講師を務めた古文書歴史講座でも、「私は長井先生の教え子です」と質問をしてくださった方もいらっしゃいました。

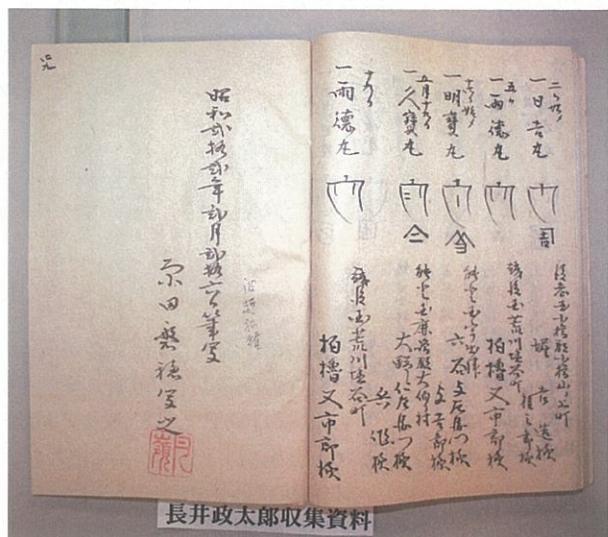
長井さんは学生時代から地理学を専攻し、母校の山形県師範学校(のち山形大学教育学部)に地理学の教官として着任された方ですが、亡くなられた際の追悼文では「先生の研究領域は、地理学のみならず、歴史学の分野にまで及び、集落の歴史地理学的研究、市の研究、交通史の研究、島の研究、さらに山形県地誌、飛島誌、村史、町史、県史と非常に幅広いものがありました。」と山形の研究への多大な功績がたたえられています(横昭一氏執筆「長井政太郎先生のご逝去を悼む」歴史地理学会)。

山形県には置賜・村山・最上・庄内と大きく分けて4つの地域がありますが、長井政太郎収集資料はまんべんなく各地の古文書や地籍図を含んでいます。最初に私が目を見張ったのは、日本海に浮かぶ飛島(現山形県酒田市)にまつわる古文書でした。長井さんは、たくさんの著作をこなしていますが、そのなかで『飛島誌』(弘文堂、1951年刊。のち改訂増補版、国書刊行会、1982年刊)は、自然・地理・気候、そして歴史に至る飛島のすべてを1冊にまとめた労作です。収集資料にはその実証を支えた「飛島資料」・「飛島村資料」と整理されている数十点の分厚い文書があり、江戸時代から明治時代の情報がたくさん書き留められています。



●【写真2】長井政太郎収集資料73「諸国入船控帳」(明治23~明治27年)

飛島は日本海海運において要衝の地で、西日本と北海道を往来する船が数多く寄港していました。【写真2】は明治20年代の飛島に停泊した船名が記録された帳面です。ここには筑前国(現福岡県)博多、讃岐国(現香川県)小豆島、薩摩国(現鹿児島県)石垣など遠方に拠点を置く廻船が名を連ねています。文書全体を読んでいくと、江戸時代以来の和船(帆船)と西洋型の汽船が混在していることもわかつきました。当時は日本の物流システムが少しづつ近代化していく途中だったといえるでしょう。



●【写真3】長井政太郎収集資料248「諸国御客船始メ控帳」(昭和22年筆写)

飛島関係で興味深いのは、第二次世界大戦中から戦後間もないころに長井さんたちが現地で古文書の原本を調査し、そっくりそのまま手書きで書いた文書が多数のこされていることです。【写真3】は、さきほど紹介したものと同じ性格を持つ、弘化4年(1847)に作成された「客船帳」を、原田磐穂なる人物が波越旅館で昭和22年(1947)2月26日に筆写したとあります。原田氏は調査メンバーの一人で、「筆写のベテラン」だったようです(山形県立博物館平成14年度館蔵品展解説)。

現在、私たちはデジタルカメラで古文書を撮影し、パソコンを使ってじっくり読むことができます。しかし、当時はそのような状況になく、丁寧に原本を書いていく作業があり、その活動を通じて歴史が継承されてきたことに大きな感動をおぼえます。

※長井政太郎氏が生前収集した資料は、山形県立博物館と山形大学附属博物館に所蔵されています。

(荒武賢一朗)

古文書の
ひろば

2

伊藤東溟の史料とその生涯 —北海道当別町戸田家文書より—

札幌中心部から北東に 20~30 kmほど行くと、そこは石狩郡当別町の市街地です。このあたりは、今から約 150 年前の明治 5 年（1872）、旧仙台藩主伊達家の一門で、かつて岩出山を領した伊達邦直が、旧臣たちを率いて移り住んだ土地でした。そうしたことから、当別町には今も岩出山伊達家の旧臣の家が残っています。江戸時代、代々着座四番座の家柄であった戸田家もその一つです。

この戸田家には書画帖と題する夥しい数の漢詩や画が伝わっています。なかには、大沼沈山・小野湖山・安積良斎・重野安繹・藤野海南・藤森弘庵・大槻磐溪・廣瀬青邨・羽倉簡堂・大橋訥庵・川田麿江・中村正直といった幕末から明治にかけての著名な文人・儒者の漢詩もみられます。これらは岩出山伊達家の臣・伊藤東溟（律之助、子律、茂雄）の遺品です。

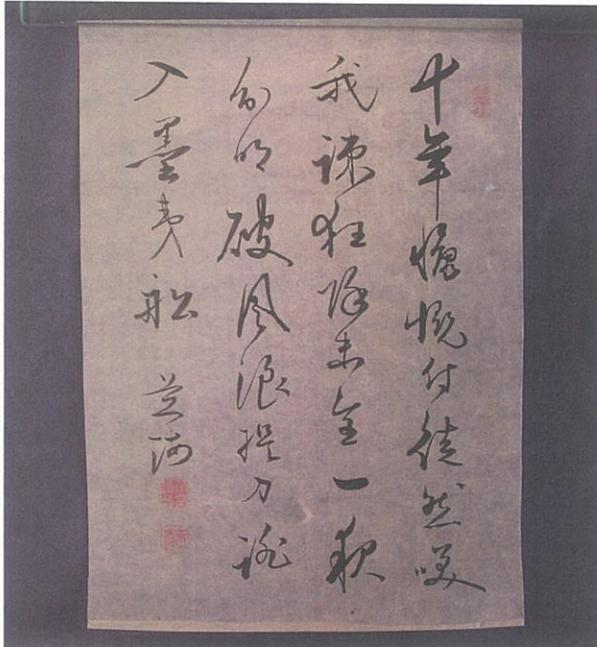
東溟は文政 10 年（1827）3月 4 日、戸田家に生まれ、その後、同じく岩出山伊達家に仕える伊藤家（永代家老）に養子に入りました。書画帖の詩や画は東溟が江戸に遊学中に得たものです。東溟は安政 2 年（1855）、幕府の学問所である昌平寮の書生寮に入寮、安積良斎のもとで学び、文久 2 年（1862）には書生を統括する舎長に就任しました。

昌平寮は幕臣の子弟以外にも門戸を開いており、全国の諸藩から俊英が集いましたが、彼らは書生寮で幕府の儒者について学ぶことになっていたのです。そのようなわけで、書画帖には書生寮で生活をともにした学友から寄せられた詩も含まれています。

【写真 1】は、会津藩士・宗像真太郎（靖共、芝海、節斎）の詩（七言絶句）です。宗像は安政 5 年（1858）に書生寮に入寮して林復斎のもとで学び、詩文掛・舎長助を務めています。のち文久 2 年（1862）に、会津藩主・松平容保が幕府から京都守護職に任命されると、主君に先立って上京し、京都を横行する尊王攘夷派の浪士の動静を探りました。

宗像が書生寮に入寮した安政 5 年は、おりしもアメリカ等とのあいだで修好通商条約が結ばれ、攘夷熱が高まっていたとき。詩からは何事もなしらず切歎扼腕する、当時の血氣盛んな青年の姿が垣間見られます。なお、東溟は宗像とともに親しい間柄であったらしく書画帖には宗像の詩が 9 篇残されています。

東溟も当初攘夷論者でしたが、やがて攘夷の非を



●【写真 1】会津藩士・宗像真太郎の詩

(訓読)

十年慷慨付徒然

十年の慷慨徒然に付す

唉我疎狂降未全

唉ふ我れ疎狂にして降りて未だ全からざるを

一夜分明破風浪

一夜分明風浪を破る

提刀誂入墨夷船

刀を提げて誂み入らん墨夷の船

(現代語訳)

十年もの間、慷慨の気を持て余したまま、愚かにも堕落して未だ志を果たし得ぬとは、我ながらお笑い草だ。風が浪を破つて夜が明ける。刀を携えてアメリカ船に乗り込もうではないか。

悟り、開国論に転じます。しかし、それとは裏腹に、文久期（1861～1863）は、尊王攘夷派の公家と結んで朝廷を牛耳った長州藩が政局をリードし、幕府は朝廷に攘夷の実行を迫られ、窮地に立たれます。このような情況は、東溟にとって憂慮にたえないものでした。

文久3年（1863）8月18日、局面は突如として一転します。この日、孝明天皇の命をうけた会津・薩摩両藩により御所が封鎖されると、長州藩は御所の警衛を解かれて京都を追われ、三条実美をはじめとする尊王攘夷派の公家は参内を停止されます。いわゆる8月18日の政変です。

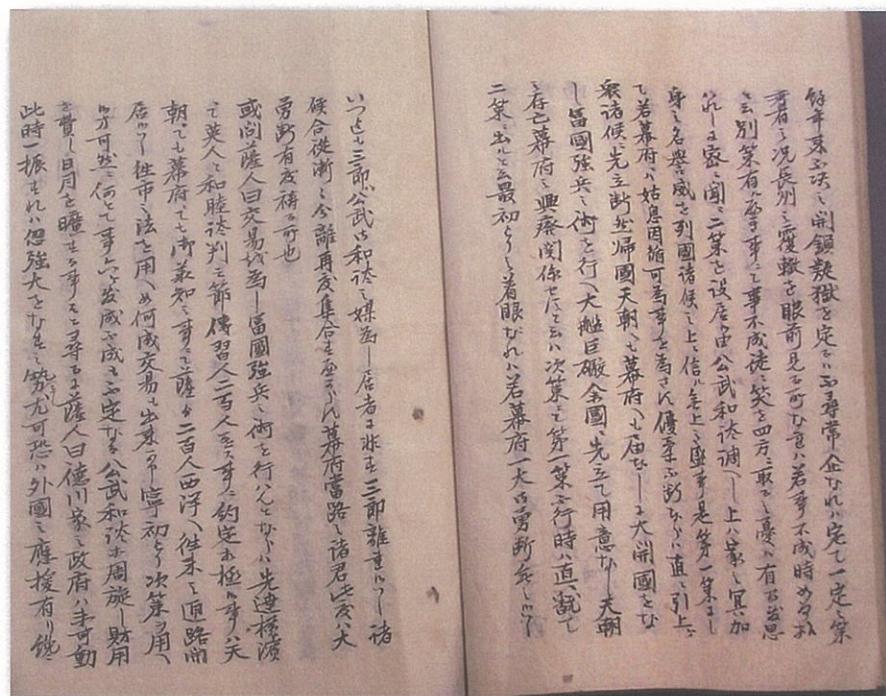
この政変後、朝廷は国是を決するため將軍および全国の諸大名に上京を命じます。それは東溟の目に好機到来と映りました。彼は早速筆を執り、幕府に意見書を提出します。その草稿が現在戸田家に残されています（【写真2】）。「まずは国是を開国と定め、そのうえで、朝廷は国政の一切を幕府に委任し、幕府のもと拳国一致で富国強兵をはかるべきだ」。これが東溟の考える「公武合体」でした。そして、それを実現に導く勢力として越前・会津・薩摩の3藩に期待を寄せます。しかし、その一方で、東溟にとって薩摩藩は、攘夷を唱える長州・水戸両藩とともに警戒の対象でもありました。薩摩藩

は事態の変化に応じて態度を変えるところがあると見ていたのです。

この後、東溟は主君の伊達邦直に召されていつたん岩出山に戻りますが、元治元年（1864）9月、ふたたび江戸に上り、着くやいなや仙台藩江戸留守居の大童信太夫から政情の探索を命じられます。書生寮時代に培った広範な人脈と、政局を見る確かな目を買われてのことでした。おりしも幕府と長州藩とのあいだで戦争が現実味を帯び始めるなか、東溟は病を推して西国へ向かい、両者の交渉の経過を探索、さらに戦争が勃発すると戦火をかいくぐって戦況を見聞します。しかし、病はその身体を着実にむしばんでいました。慶応2年（1866）10月23日、江戸で帰らぬ人となります。享年41。これより先、幕府は長州藩との戦争に事実上の敗北を喫し、時代は大きく動き出そうとしていました。

友人である仙台藩士の岡千仞は東溟の墓碑銘のなかで「もし子律（東溟のこと）が文章を残していれば、その学問を不朽にしたかもしれないが、藩は彼を四方に遣わし、その結果彼は病に窮して恨みを含んで土と化した」と述べています。時代の波は仙台藩を翻弄し、そしてその波は東溟にも及び、彼の若い命を奪ったのです。

（友田昌宏）



【写真2】文久3年の伊藤東溟の意見書

古文書の
ひろば

3

松島古文書散歩

松島は「日本三景」の一つとして知られ、年間約280万人が訪れる宮城県随一の観光名所です。松島観光協会のホームページには、観光のおすすめモデルコースとして五大堂・瑞巌寺・円通院・天麟院が紹介されています。伊達氏が再興した瑞巌寺とこれら周辺の寺院は、一般庶民が江戸時代から好んで足を運ぶ場所でした。たとえば、文化6年（1809）に現在の山形県鶴岡市から伊勢参宮の旅に出た一行は、松島に立ち寄って瑞巌寺・陽徳院に参詣し（個人蔵「道中記」）、文政7年（1824）に現在の千葉県流山市から出羽三山へと向かった一行は、松島で瑞巌寺・五大堂に参詣しています（「奥州道中記」『流山市史料集5』）。

一方、知識人たちは古代・中世の歌枕・靈場的風景を求めて、松島の南に位置する雄島を訪れました。その一人、伊勢国松坂の商人・文芸家の小津久足は、天保11年（1840）に雄島を訪れましたが、想像と異なり蕉門俳人の句碑が乱立する風景に通俗性を感じ、嫌悪感を露わにしています（慶應義塾大学文学部古文書室蔵「陸奥日記」）。

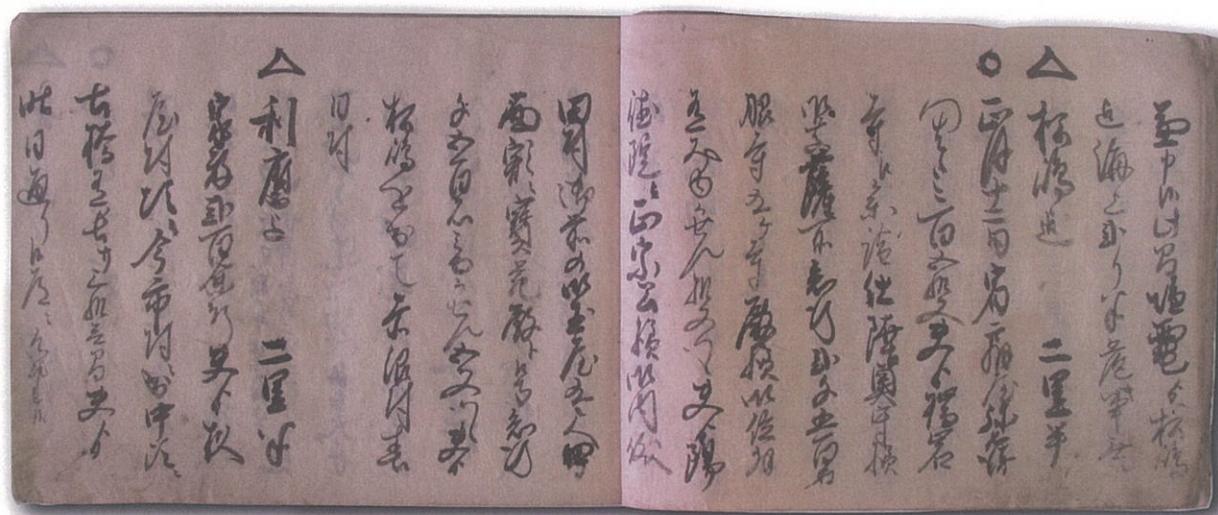
江戸時代の松島旅行といえば「おくのほそ道」ですが、それ以外の旅の記録からは、こうした当時の松島の多様な実像が浮かび上がります。

ただ、明治時代以降、松島では一般庶民の趣向に対応する形で観光整備が進められ、壮麗な自然景観と瑞巌寺を中心とする寺院群を前面にアピールする観光名所・松島が誕生したと考えられます。

2018年3月、松島町では宮城県内初となる「歴史文化基本構想」を策定しました。筆者も策定委員として会議に参加しています。この基本構想では、松島町の歴史を5つのストーリーでまとめていますが、その中には「1000年の靈場 松島」が盛り込まれています。また、筆者が上廣部門に着任して以降、久足が愛した富山や、宿泊した観月楼（扇屋）の調査にも参加する機会に恵まれました。今後は「瑞巌寺（伊達家）」や「おくのほそ道（松尾芭蕉）」だけでなく、一般に注目されてこなかった松島の歴史や古文書などの文化財が町の発展のために活用されることが期待されます。

観光立国が推進され、文化財保護法の改正が議論される今日、文化財をめぐる環境はめまぐるしく変化しようとしています。これが、地域の古文書への新たな脚光とその活用・保存への機運となるよう、活動していくたいと思います。

（高橋陽一）



●「道中記」（1809年、個人蔵）の松島の記述

講演会余話

「講座：地域の歴史を学ぶ」は毎年、秋に部門が開催している講演会ですが、平成 29 年度（11月 18 日）は大崎市古川の大崎生涯学習センター（パレットおおさき）を会場に、「江戸時代の民間天文暦学～名取春仲が伝えたもの～」というテーマで、開催致しました。

黒須潔さんには当日、「名取春仲と坤輿万国全図・天文図屏風」と題してお話をいただきましたが、今回は宮城県に残る仙台藩ゆかりの坤輿万国全図について掘り下げて、あらためてその来歴についてお書きいただきました。

（友田昌宏）

仙台藩にゆかりのある坤輿万国全図

仙台郷土研究会理事 黒須 潔

坤輿万国全図は、イタリアの宣教師であるマテオ・リッチが 1602 年に中国で製作した世界地図であり、江戸時代に作られた多くの世界地図に影響を与えたとされています。刊本と呼ばれるオリジナルは世界に 5 点ほどしか残っていませんが、その内の 3 点が国内にあります。このほか、坤輿万国全図を写した写本図は、国内に 32 点確認できています。この写本図の約 4 分の 1 は仙台藩にゆかりのある図です。まず、宮城県図書館には刊本と写本図が 1 点ずつあり、ともに国の重要文化財に指定されています。写本図は、

仙台市博物館に 2 点、東北大学附属図書館に 1 点あるほか、個人が所蔵する図が県内に 2 点、県外にも 2 点確認されています。

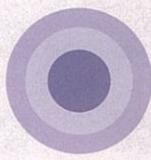
このうち東北大学附属図書館にある 1 点は狩野亭吉博士が収集したもので、これを除く 7 点の写本図が仙台藩の天文方関係者に伝わった図であることがわかっています。これらの図には、ある共通点があります。カスピ海に注ぐボルガ川の支流のひとつが、抜け落ちて描かれていないのです。この間違いは、地図が一部しか残っておらず確認の取れない 1 点を除き、全てに共通しています。さらに、記載されている文字情報などを比較すると、宮城県図書館にある写本図が原図であるなど様々なことが分かります。DNA 鑑定のようなものでしょうか。

さて、宮城県図書館の坤輿万国全図の来歴ですが、これには 3 つの説があります。一つ目は、坤輿万国全図の刊本は禁制品ですので、藩祖・伊達政宗の時代に手に入れたという説。ただし、写本図には 1664 年に成立した国名が記されているので、政宗は手に入れることができません。二つ目は、幕府天文方の渋川家から仙台藩の天文方に来たという説。幕府天文方の渋川家に「リッチの坤輿万国横図」があったと「春海先生実記」に書かれていますが、実際に渋川春海が残した世界地図は、坤輿万国全図とよく似た別の世界地図なので、「横図」と「全図」は同一なのか疑問が残ります。三つ目は、仙台藩天文方の戸板保佑が京都で手に入れたという説。写本図の一部に変体仮名が使われていますが、京都の商人であった角倉了以の所蔵といわれる坤輿万国全図にも変体仮名が使われていることから、仙台藩天文方で京都に行つたことがある戸板が写してきたのではという説です。

これ以外という選択肢も含めて、皆さんはどう思われますか？



●刊本（左）と写本図（右）
のボルガ川周辺



仙台市の市民参加型事業に参加して

仙台市宮城野区田子市民センター「田子今昔物語」と青葉区広瀬市民センター「関山街道の魅力を伝える」は、ともに市民が主体となって地域の歴史を学び、発見していく取り組みです。部門高橋は、この2つの事業に講師として参加しました。

「田子今昔物語」への参加は、田子地区の加藤家文書の調査がきっかけです。2017年2月にこの古文書に初めてお目にかかり、4月・5月に地元の「冠川地元学の会」のみなさんと共に、古文書計100点の撮影を行いました。その後、勉強会を経て、9月20日に田子今昔物語第1回公開講座「古文書が語る田子の歴史」が開催され、加藤家文書をもとに講演しました。以後、月に1回程度のペースでこのイベントに参加しています。

「関山街道の魅力を伝える」は、昨年まで講師をつとめていた東北大災害科学国際研究所の天野真志氏の転任に伴い、講師を引き継ぎました。こちらも毎月探訪会(町歩き)と座学(勉強会)が交互に行われ、広瀬地区(愛子・芋沢方面)の歴史を市民のみなさんが熱心に学習していました。2018年3月にはシンポジウムも行われています。

これらの勉強会では、毎回講師席が用意され、そこで解説なりコメントなりすることになります。古文書の解読だけならまだよいのですが、古代・中世の地元の歴史、地元と伊達氏との関

係など、参加者から出される多岐にわたる話題や質問に対し、コメントに窮することも多く、毎回冷汗三斗の思いでした。

大学で日常を過ごしていると「グローバル」という言葉をよく耳にしますが、市民が研究者に求めているのは「ローカル」な問いへの答えです。歴史研究者として、さらに「守備範囲」を広げなければならないと、ひしと実感しました。

(高橋陽一)

地域とのあゆみのなかで

地元学と古文書

冠川地元学の会 原 康夫

地域の旧家から見つかった古文書。読解は素人には至難の業だ。が、幸運にも我が地元学会員の人脈で東北アジア研究センターの高橋陽一先生に出会えた。その御指導で、100点に及ぶ古文書を会員でデジタル保存し、読解する。初めての体験だ。村のいとなみ、風土記述上の世界が浮かび上がる。さらには、伊達家に係る未見の歴史を語る文書もある——あること自体が謎だ。公開講座として高橋先生を講師に「古文書が語る田子の歴史」、会員の案内解説で「まち歩き」を開講することもできた。既知識をなぞっていた地元学活動に、お陰でこの一年、一気にディスカバリーの楽しみが加わった。この先もわくわくしながら先人の営為を発掘し、見つめ直していこう。



●加藤家文書の撮影

上廣歴史資料学研究部門 2017年度の活動

古文書目録作成・撮影作業

加美町米谷家文書・南三陸町伊里前契約会文書・川崎町佐藤仁右衛門家文書・利府町小野家文書・白石市渡辺家文書・白石市佐久間家文書・白石市佐藤昇家文書・白石市図書館所蔵貴重書・白石市一條家文書・仙台市加藤家文書・仙台市橋家文書・北海道当別町吾妻家文書

古文書・歴史講座

■通年■

- 市民古文書サークル「岩出山古文書を読む会」中級講座(協力:部門、2017年5月15日~、通年月2回)
- 市民古文書サークル「片平古文書会」(協力:部門、2017年4月5日~、通年月2回)
- 市民古文書サークル「白石古文書サークル」(2017年4月26日~、通年月1回)
- 「学生向け古文書を読む会講座」(主催:部門、学内、2017年4月20日~、通年月2回)
- 「田子今昔物語」仙台市加藤家文書勉強会(主催:仙台市田子市民センター、協力:部門、2017年6月28日~、月1回)
- 市民古文書サークル「かわうち古文書村」(協力:部門、10月31日~、月約1回)
- 「関山街道の魅力を伝える」探訪会・座学(主催:仙台市広瀬市民センター、協力:部門、2017年8月6日~、月1回)
- 市民古文書サークル「もみじの会」(協力:部門、2018年1月15日)
- 「くずし字入門ゼミ」(主催:部門、2018年2月14日~、月2回)

■定期■

- 「初めての古文書講座」(主催:部門・白石市教育委員会・白石市中央公民館、前期:2017年5月17日~7月12日、後期:2017年10月11日~11月15日、全10回)
- 「上廣歴史資料学研究部門古文書講座」(2017年5月15日~7月24日、2班各全5回)
- アメリカ・シカゴ大学「The University of Chicago 2017 Reading Kuzushiji Workshop」(主催:シカゴ大学東アジア研究所、協力:部門、2017年6月12日~16日)
- 「上廣歴史資料学研究部門古文書歴史講座」(2017年10月2日~12月11日、2班各全5回)
- 村田町古文書講座(主催:村田町歴史みらい館、共催:部門、2018年1月23日、1月30日、2月6日、2月14日、2月21日)
- 平成29年度仙台市博物館「はじめてのくずし字」(共催:部門、2班各全2回、2018年1月15日・1月22日および2018年1月29日・2月5日)
- 東北大学附属図書館研修「シリーズ書物を学ぶ くずし字講座」(協力:部門、2018年2月2日・2月9日・2月23日・3月2日)

展示会

- 利府町郷土資料館平成28年度ミニ企画展「明治・大正時代の利府」(監修:部門、2017年3月1日~5月7日)
- 東北大学東北アジア研究センター資料展示スペース「上廣歴史資料学研究部門の紹介」(協力:利府町教育委員会、2017年5月1日~継続中)
- 平成29年度有備館企画展示「有備館の先生、幕末・維新を駆ける—伊藤東溟・鶴見貫一郎里帰り史料展—」(主催:大崎市教育委員会、協力:部門、2017年6月27日~9月3日)
- 東北大学片平まつり「くずし字を書いてみよう～江戸時代の文字を知る～」(2017年10月7日・8日、於東北大学片平キャンパス)
- 白石市中央公民館第37回公民館まつり出展「白石古文書サークルの活動紹介・くずし字を書いてみよう」(主催:白石古文書サークル、協力:部門、2018年3月3日・4日)

講演会

- 平成29年度山形県立博物館「古文書歴史講座」(協力:部門、2017年7月1日、2018年1月21日)
- 平成29年度有備館企画展示「有備館の先生、幕末・維新を駆ける—伊藤東溟・鶴見貫一郎里帰り史料展—」基調講演(主催:大崎市教育委員会、2017年7月8日、於大崎市岩出山公民館)
- 第2回「白石市民大学」(主催:白石市教育委員会・白石市中央公民館・部門、2017年7月18日、於白石市中央公民館)
- 講演会「古文書が語る田子の歴史」(主催:仙台市田子市民センター、共催:宮城野区中央市民センター、協力:部門、2017年9月20日、於仙台市田子市民センター)
- 講演会「講座:地域の歴史を学ぶ ◎大崎 江戸時代の民間天文暦学～名取春伸が伝えたもの」(主催:部門・岩出山古文書を読む会、共催:大崎市教育委員会、2017年11月18日、於大崎生涯学習センター)
- シンポジウム「『東北の近代と自由民権—「白河以北」を越えて』が問いかけるもの」(主催:部門、共催:東北史学会・仙台郷土研究会・福島自由民権大学、後援:河北新報社、2018年2月17日、於東北大学川内北キャンパス)
- シンポジウム「関山街道の魅力を伝える」(主催:公益財団法人仙台ひと・まち交流財団・仙台市広瀬市民センター、共催:関山街道フォーラム協議会、後援:部門、2018年3月18日、於仙台市広瀬市民センター)

受賞

- 第7回地域研究コンソーシアム賞社会連携賞(2017年10月28日、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークとともに)